

研究・調査報告書

報告書番号	担当
520	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Association of alcohol intake with the risk of malignant lymphoma and plasma cell myeloma in Japanese: a population-based cohort study (Japan Public Health Center-based Prospective Study). 日本人における飲酒と悪性リンパ腫および形質細胞腫の関連について 地域住民コホート (Japan Public Health Center-based Prospective Study)における検討	
執筆者	
Kanda J, Matsuo K, Inoue M, Iwasaki M, Sawada N, Shimazu T, Yamaji T, Sasazuki S, Tsugane S; Japan Public Health Center-based Prospective Study Group.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Cancer Epidemiol Biomarkers Prev. 2010 Feb;19(2):429-34. Epub 2010 Jan 19.	
キーワード	
飲酒、悪性リンパ腫、形質細胞腫、コホート研究	
要 旨	
目的： 日本人における飲酒と悪性リンパ腫および形質細胞腫リスクの関連を明らかにする。	
方法： Japan Public Health Center-based Prospective Study の参加者 95,520 人（男性 45,453 人、女性 50,067 人、ベースライン調査時年齢 40~69 歳）を対象として飲酒と悪性リンパ腫および形質細胞腫発症リスクとの関連を検討した。コックス回帰モデルにて、飲酒による悪性リンパ腫および形質細胞腫の多変量調整ハザード比を算出した。	
結果： 平均追跡期間 13 年の間に悪性リンパ腫 257 例、形質細胞腫 89 例を確認した。一週間あたり 300g 以上の飲酒は一ヶ月に 1 回未満の機会飲酒者と比較するとリンパ節新生物発症のリスクが有意に低かった（ハザード比 HR(95%信頼区間): 0.60(0.37-0.98)。また、飲酒量は統計的に有意にリンパ節新生物発症と関連を認めた(P = 0.028)。悪性リンパ腫、形質細胞腫、非ホジキンリンパ腫についても同様の関連が認められた。しかしながら、その結果が有意であったのは非ホジキンリンパ腫についてのみであった。その理由としては各群のサンプルサイズが小さいことが影響していると考えられる。	
結論： 日本人において飲酒はリンパ節新生物発症のリスクと負の関連を認め、その関連は特に非ホジキンリンパ腫で強く認められた。	